

仙台つどいの家編集室 発行責任者 下郡山 和子

発行日2001年3月27日

〒981-8001 仙台市泉区南光台東1-19-18

TEL022(252)6128 FAX022(388)6128

e-mail sendai@tsudoioie.or.jp

3月11日(金)午後2時46分地震発生。M9という今だかつてない大きな揺れてした。同時に電気・ガス・水道ともストップ。しかし全員怪我もせず無事に園庭に避難。サッシが外れ、蛍光灯が落下する中、職員の避難誘導は見事でした。

日頃からの避難訓練のためなのでしょう。咄嗟の事変に動けない自閉症の方も、混乱もなく素早く避難できました。外出していたグループとも、すぐに携帯メールで連絡できました。10分程で携帯は通じなくなり、到着するまでとても心配でした。その後、次々大きな余震があり、雪も降ってきました。風邪を引かすわけにはいかないと、余震の合間をぬって建物に入り、利用者の防寒ジャンパーや毛布・布団・マット等を引きずり出し、利用者さんを寒さから守るのに必死でした。そして、南光台は丘陵地で谷を埋め立てた造成地のため地盤が弱く、あちこちに亀裂が走りました。近くでガス臭もして、ヒヤーンとしました。夕食準備の時間帯でなかったのが幸いでした。

当施設は通所の生活介護サービス事業所ですので、いつもなら3時半過ぎには保護者が迎えに来るのですが、なかなか来ません。連絡も来ません。街の中は、道路に亀裂が入り、信号も止まって大渋滞のようです。雪が降りまっ暗な中、お母さんたちも必死だったと思います。最後に迎えに来てくれた方が帰ったのは、もう夜中の11時過ぎでした。深夜12時、子供や高齢の親のいる職員は帰宅。一人暮らしの職員、帰る手段のない職員は、施設長とともに「すてっぷ・はうす」に宿泊。「すてっぷ・はうす」は、レスパイトサービスのための建物です。建物の安全は確認できたものの余震が始終あるので、すぐ脱出できるよう玄関は開けっぱなしでとても寒い夜でした。懐中電灯だけが頼りでした。

明け方、元職員の伊藤さんが山形から駆けつけ、惨状を全国にメールで発信しました。次の日からは携帯が鳴りっぱなしでメールがどんどん入りましたが、電池もすぐなくなり、圏外となってつながりません。法人本部のあるつどいの家・コベルとは防災無線で連絡できました。無線器は理事長の発案で購入し、丁度震災前日に納入され、間一髪で使用できたのです。携帯や置き電話が役に立たない中、当法人の施設間との連絡もでき、心強かったです。

若林区にあるつどいの家・コベルは、沿岸部から5Kmの所にあり津波は免れました。建物もビクともしませんでした。しかし海岸沿いに住む利用者や職員の中には家が流され

た人もいました。そこで、危険で帰ることができない人や、余震が起きる中、介護が不安な方・職員も含め総勢30人がコベルのホールで過ごしていました。

3月12日(土)仙台つどいを家の破損は大きかったので、出勤できた職員で、破損した建物や備品の様子を写真に撮り、片付けをし、利用者宅の安否確認です。水がない方には自転車で水を届けました。医療的ケアの人には吸引機の充電を頼まれました。発電機を使い電源を確保し充電をしたもののすぐに発電機のガソリンが無くなりました。公用車も使えなくなり、安否確認が難しくなりました。どこへ行ってもガソリンを売ってもらえず、弱りました

3月13日(月)早朝、施設長へ連絡が入りました。かつて大阪の大和川園やキンダーハイムの施設長(今は奈良やすらぎの丘)だった佐藤宜三郎氏のおつきあいで、よくイベントに参加した仲間だと言う方々が、阪神淡路大地震のときの恩返しをしたいと大阪に集結し、雪の中北陸を通過して山形から仙台に来たとのこと。仙台つどいの家には泉区にありますので、泉インターから電話が入り、30余名のスタッフが3トントラック8台とその他の車5台で仙台つどいの家を目指すとのこと。仙台つどいの家は駐車場に亀裂が走り狭く危険なので、法人本部がある若林区の「つどいの家・コベル」に来ていただきました。夕方遅くの到着でしたが、30名のスタッフの方々は疲れも見せず、次の日からの活動について理事長との打ち合わせです。被災した人々へ炊き出しをするとのこと。理事長は町内会長や避難所となった学校長と交渉し、炊き出し隊受入れのために奮闘しました。そして、若林地域の8箇所の小・中学校で炊き出しが行なわれ、津波で避難した人々は無論、電気・ガス・水道が止まり、商店も開かれず食物を求めてウロウロしていた付近の一般市民もみんな温かいものが食べる事ができました。5日間で約2万食の提供です。その間グループに分かれ、石巻の「第二ひたかみ園」にも行っていました。若林区や石巻は被害が大きかっただけに、篤い人情に裏付けられた力強い支援に癒されました。感謝・感謝です。

3月14日(月)京都の相楽作業所からも、早速北陸まわりでたくさんの支援物資と義援金を届けて下さいました。つどいの家は何とかなるので、石巻で孤立無援にいた「第

避難時の様子と

二ひたかみ園」に行っていただきました。惨状の報告を受け廣瀬施設長の電話が入り、すぐ第二次隊を出し利用者支援のために10名の職員を派遣したとのこと。どんなに心強かったでしょうか。本当にありがたいことでした。関西方面の方々の行動力には脱帽するばかりです。

3月15日(火)我が家の置き電話が使えるようになり、あちこちの友人施設長たちから見舞いの言葉を頂きました。中には、涙ながらに話す方もいて、こんなに仙台つどいの家を応援してくださっているんだと、有難く嬉しく元気が出ました。また、思いがけず遠く広島県や愛知県の方からも寄付金を送って頂きました。つどいの再建のために使いたいと思います。いただいた大量の水やオムツなどは、職員が手分けして水の出ない地域の町内の方々にも配布することができました。

この恩返しは、一日も早く通常の活動を始め、利用者さんの笑顔を取り戻すことです。仙台つどいの家は3グループに分かれ、半数の方は、つどいの家・コベルと合同で活動し、半数の方はどこかに場所を確保して、活動しようと近隣の小中学校や特別支援学校・コミュニティセンターなどの一部屋を借りる算段をしています。今のところ、いずれも断られました。いわく安全性、いわく公平性…まだ家が流され、出勤できない職員、地下鉄が動かず通勤手段に苦慮している職員もいます。しかし、何とか工夫をしても28日には開始することにしました。重心の方の送迎用の軽油を、なんとか確保できました。当施設の利用者は、重いしょうがいの方が多く、家の中でも一人では居られません。親は買い物にも、いけず、ガソリン確保のために、何時間も行列するわけにもいかないのです。親も子どもどんなにストレスを溜めておられるか想像に難くないのです。

建物の修復については、全く先が見えません。全壊や半壊でもなく補助の対象になりにくく、亀裂の入った地盤は直しようもなく、水漏れがあり、ガスも止められています。電気も一定時間しか使えません。この修復にはどのくらいお金と時間がかかるのでしょうか。一級建築士に見ていただいたところ、傾いた駐車場にあるプレハブ事務所は、大きな余震がくれば、下の道路におちる可能性があるため、すぐに安全な場所へ移動するようとの助言です。傾いてしまった電柱も、垂れ下がった電線の修理も、東北電力を待っていてはらちが明きません。行政が動き出すには時間がかかります。自助努力しかないのでしょうか。ガス管も水道管も浮いています。天井も落ちそうで不安です。安全が確保できるまで、利用者は建物に入れるわけにはいかないのです。

以上現状報告ですが、支援に来てくださった方、義援金を送ってくださった方々のご好意を無駄にすることのないよう頑張るつもりです。復興をかけて… 施設長 下郡山 和子

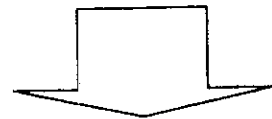
もみじ・さんしょグループ

大きな揺れが長い時間続きました。その間は毛布や敷いていたマットの一部を被ってもらい落下物による怪我を防止、同時に職員が利用者さんの上に覆いかぶさるようにし、大きな揺れが収まるのを待ちました。

少し揺れが収まった時に、一時避難場所の中庭へ窓側から避難しました。その後すぐに窓ガラスが割れ、ロッカーも倒れたので間一髪でした。

当日は雪も降るととても寒い日だったので、車いす利用の多いもみじ・さんしょグループの方々の為、マットや毛布、上着を建物内から中庭へ運び出しました。

車いすを利用している方の多いもみじ・さんしょグループでは、1対1でないと避難できません。地震時にすぐ事務職員や厨房職員がグループに来て、移動を手伝ってもらえたので、怪我もなくスムーズに避難できました。



○電話がつながらなかった為、地震当日欠席していた方とは連絡が付きませんでした。翌日、訪問してグループ全員の無事を確認しました。

○さんしょグループには医療的ケアの必要な方が多く在籍しています。「痰の吸引をする）吸引器の充電がなくなりそう」とのことと、仙台つどいの家の発電機を使って、吸引器の充電を行いました。

○震災1週間後～各家庭への訪問を行い、安否確認と、足りないものをいただいた支援助物資から各家庭に配布しました。特に2人家庭の方は食料を買いに出かけられない為、食料・水・野菜などが喜ばれました。

その後の安否確認

めいぷるグループ

ちょうど本人の会が終わり、保護者販売、近隣への配達準備をしていたとき、被災しました。利用者の方と一緒にいたこともあり、机の下への一時避難はスムーズに出来ました。また非難経路が近く、迅速に行うことができました。恐怖からか、えづいてしまったり、興奮状態になってしまう方もいましたが、地震がおさまっていくにつれ、落ち着いていくことができました。

震災発生が降所時刻の30分程前だった為、利用者の所在が明らかでスムーズに確認が取れました。降所後の発生であれば公共交通機関で自力通所されている方の安否確認が困難であったろう事が想像され、その際の確認方法についてはご家族とも話し合いが必要になると感じました。

かえでグループ

私たちは、利用者7名、職員1名、実習生1名で泉大沢のショッピングセンター2階フードコートにて、お茶を飲んでいたら地震が発生しました。お店の中の照明やガラスが落下したり、スプリンクラーが作動したりしました。利用者さんの中には自らテーブルの下に隠れる方、驚きのあまり身動きが取れない方もいました。施設までは裏道を通ることで、比較的早く到着することが出来ました。

駐車場へ避難する際には、見ず知らずの方も利用者さんの手を引いて誘導してくれたので、大変助かりました。

けやきグループ

そろそろ降所の準備を始めようとしていた所に大きな揺れが起き、偶然にも、外出先から帰ってきたメンバーの半数以上はけやきルームに戻っていたところでした。室内には利用者8名、支援者3名に他グループから支援者1名駆けつけ、支援者が利用者の頭に蛍光灯が落ちて当たらないよう頭を抱え、揺れも大きかったので動かないよう支えました。

けやきは、天井のエアコンのフードが外れ、棚の上に置いてあった加湿器が落ちた程度でしたが、避難経路である園庭へ続く通路のコンクリートが盛り上がり、安全に移動できる状況ではありませんでした。揺れが小康状態になってから二人抱えて園庭へ避難しました。園庭へ避難してからも小雷が舞う中、施設内の布団類を全て出し、普段のように自由に移動したい方もおり、その後の安全確保も大変さがありました。



○被災した恐怖や、ライフラインの寸断でいつもの生活ができない為、生活リズムが乱れストレスを抱えていた方が多かったようです。メンタル面のケアが必要な状況がありました。

○配管に損傷があり水が出ない為、工房は地震直後のままで洗い物もできません。機器の安全確認を依頼している業者もいつ来られるか分からない上、電信柱が傾き漏電の可能性があると言われ、当面パンの作業をすることができなくなってしまいました。

○翌日から訪問や電話などで全員の無事を確認しました。

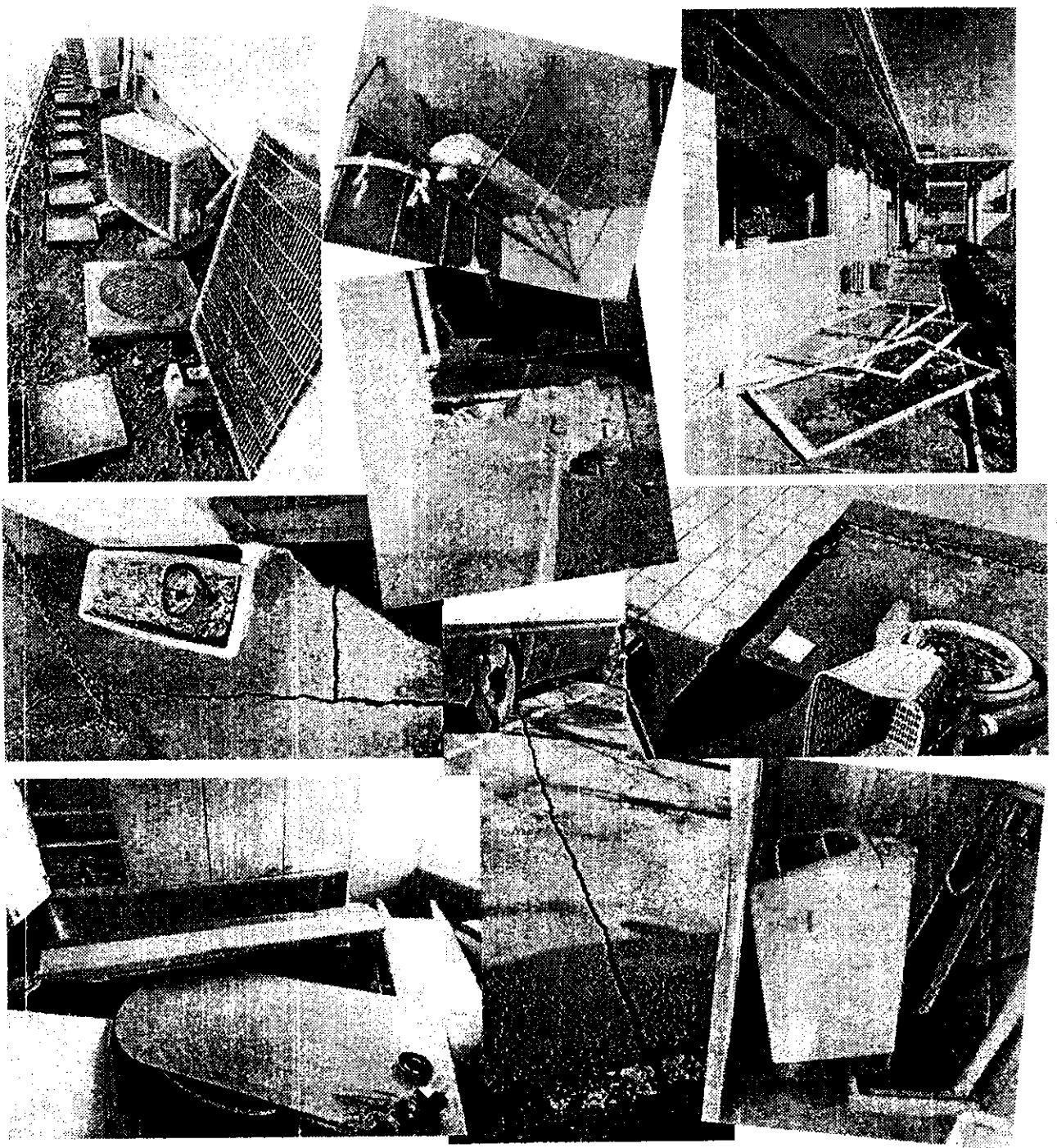
○余震が来るたびに、怯えている利用者さんもいますが、徐々に落ち着いてきたようです。

○震災一週間後からの家庭訪問では、安否確認とともに必要な物資の配布も行いました。お住まいの地域によって、ライフラインの復旧状態は違うので必要なものも違うようでした。

○翌日には、欠席されていた方も含め全員の安否確認ができました。

○震災後の家庭訪問では、皆さん食欲、睡眠も摂れているとの事でしたが、やはり中には食事が十分に摂れずイライラとしていたり、余震が続き恐怖から興奮している方もいました。

また、ご家族も心労等で疲労の色濃く、いつもの明るい表情が少なかった印象でした。



仙台つどいの家の被災状況を収めた写真です。(3月11日～17日撮影)

建物・地盤ともに大きな被害を受け、立ち入り禁止区域や水道管の破損も見つかった為、仙台つどいの家での日中活動がままならない現状です。しかし、比較的被害の少なかった法人内の他施設や地域・公共施設へ出かけて行っている活動を3月28日(月)より再開いたします。震災以来、初めて仙台つどいの家に集まってくる利用者の皆さん。早く顔を合わせて、笑顔で活動を行いたいな、と思っています。

また、震災直後より様々な形で本当にたくさんのご支援をいただきましたことを、この場をかりて心より感謝申し上げます。

編集後記

余震の度に、「もっと大きく揺れるのでは」「いつまで続くのだろう」と、緊張や不安を感じる毎日です。震災のショックは本当に大きなものですが、少しずつ少しずつ、復興への道を歩んでいきましょう。

「がんばろう！日本」(福地)